

巧い中ことばよしあるき大衆心く  
とく首を刎るくくくくくくくく  
けもい謙信うち笑ひ吾く智仁と  
相懸せざる虚名かろうくく地場く  
権名よろく事公せよと云けり  
士越後より帰る農夫くくくく一  
と終りくくくくく

常山紀談

藩鑑卷之二百八十一目錄

う部 四

上杉弾正大廻藤原輝虎

藩牒卷之二百八十一

上杉彈正大弼藤原輝虎

一 上杉憲政公、作京土、むりく、山岡外  
記、味下龍峯寺、まゝら、馳系、城  
中、入、まゝら、セ、俄、許、多、を、加、長、尾  
之、中、政、と、使、者、と、し、し、管、領、職、か  
ら、ハ、上、山、抱、一、の、國、景、虎、へ、讓、り、後、さ

る浮沈もたはして一向教と思ふさうし  
のうへに作らるる趣も私といふ景  
虎家迄北條丹後も法もいふ  
作も殊も年久しよの逃日の内氏康  
考も来たに事なりて憲政も腹  
うにふを北條丹州下書とい  
て原流せしむるも金議の上  
やも領書かといふも計略も副

へ丹後丹正甘糟迄に二千餘騎と  
も復もいふに記す遠く遠く丹後  
甘糟作家の味迄とて一とては  
要言の便もたに洩るよ小明日もや  
氏康号来らるるも猶遠くも  
いふに翌日上州作也といふと後  
里國もも護りも一もす憲政も始め  
供もものも多年危急の愁と教



傳り首と獄川に試らるる龍舌及し是  
柄の麓海岸にすゝまといひて官をさし  
庸近き神倉といひて傳日女を仕る  
さし友貞の憲政の同時より平井と居  
中武の太田といたり新入より  
りまといふといひて領事といひて  
と流りていふといひて故龍舌不明  
おし高祖父道隆は横死と伝ふ

其時ふ果は胎内より兄三郎公と  
そし終への内も我といふと  
対し其後兄三郎公をせし死  
ゆき果と近き傳りて龍舌及  
し先祖の讐を存し一は故道隆  
謙舎より遺言の言はかくのこし  
汝といふといひてし腹より  
る果實の者ありていふ

そとく人きくしき日かやのちた  
ゆいふふ之樂初くそむく君は是者ふ  
何しきさ意をくしき見たりきつて  
そまき文祖の伝ふもた天といはく  
しきはしきしきくはとや思はしき  
言教は謂しき道催る今この時  
節しき思ひ強き方々しきしき  
衣の袖と懐ふ心る友は真の真さめく

誓し言葉しきしき心とやあしき  
之樂何事し今も是しきしきしき  
しき平井の事しきしき東へくし  
膳宿至極の町くしきしきもや我者  
を道しきしき龍若君と有るあしき  
必は障系仕てくし彼馬方九里しき  
八埒の町くしきしきしきしき  
小あしきしき先しき友は真の真さ

として那總より入者と違つてゐるの  
やうと聞こりしに平井の長尾仙郎右  
馬の教子騎して返来り名をよめる復  
ししまるよしとて笑えりしに三樂  
よしの別後をよめる計謀と後  
景虎の意向と動かんしとて平井の  
議とよしとて物に天文十七年  
正月下旬長尾平井を討捨るよし

高人の便りにけりしに三樂人の  
警りし早速中村伊能もよめる餘人  
と従く龍舌原の途しとて平井の  
名をよるしとて一日の夜小僧く捕  
つたよを殺したるしとて城中よめる  
もをよ捨るしとて財寶と町人百姓  
争ひならんしとて遠く戸壁墻  
とこ不ち殺したるしとて荒果裏改と出奔





入るに方より一月より出引てん  
一人ももつてや討とらんしんじ  
高下権振り要言きたりく景虎と  
逢しと待たし其後の先陣中  
の小境く入し後陣と待探者  
敵の軍謀ときし急き大将景虎  
任進しとりけ。景虎故國乃  
善業と急きつて群臣と集る

軍後ありしころに長き日く哉  
中たきいしハマ川神保安重推名  
死すも等大敵を此處く、  
郭く押しの攻もつて之を  
を勢ひし名きつて外の小部ハ戦ハ  
しつて皆降参しつていしける  
時、景虎聞て是甚不可なり候令  
小歌たりし四方より蜂起し

勝一合龍の事たるも其の事又  
兵士とては是と支て好ける人  
有くも其の我欲をハチあり  
いふに四子十分散するも其の  
四五子ありとの事と兵法は人の  
小の事ありて大なるに我志は  
思惟も其の事なるに彼等も  
弱き事なり一敵の公と為せ

之驕急の構と事一此の事  
事業の内なる事九月三日  
早連川拂ひの事

後軍記

一天文十七年十月五日景虎と近智の  
信の中を看み其の事と其の事  
七人前番とて三人の甲冑は  
しめて晴信のうらとを其の事  
中不實とて遣はし其の事

政道の善悪群臣の行政民百姓の  
風俗いづるも委ぬる竊いづる土  
北の極子山川の横抗もく徳園を  
なすの終ふ又主將の大器に候し  
あまゝ位も危きと高きはるこり  
肝要なりし作と終ふ春山日記

一天文十八年四月月中旬晴信一萬三  
千餘の軍隊と率く二木岩屋を

龍たる中塔城と百圍りし  
景虎を越すと悪しき海州平へ  
出張し終ふ晴信別ち中塔の圍と  
解く今月親日海州平へ地出例の  
こく不敵の備と設を陰變陽の  
格と替もく聖陣あり是より  
同日六日より是小浜原を席しと軍  
使もく晴信の陣へ作遣はし

さし強古席一巻正と大カクし之年  
往ト橋所煙のこもここ一ノ持の梁柱  
こ軽くと持し事あつ又信丹衣出  
馬の物未多山の雪解く小川の  
増し橋流きつ居たりこゆ乗馬  
後し彙たりと四五と指場つ居し  
たつりさ音カクし一教方し  
鬼小鳩し異名も且又毎な残場

のこくしき技辭あつゆく度と守  
しし吟るしし既しは正の軍使  
武田家一行に人交たと椽の  
ししはるき、置し晴信返答と伴  
らうしとき強古席をたふと椽の上  
と突古たるし、強く彼ふと椽下よ  
了思あしと綱とゆし強し掛し小  
彼人交たと強古席を勝し交しつと

古きよきわの青多と押へて少し  
とたふせす晴信の返答と兼りて妻  
く聞てし唯活しし胸のあま  
くはたと狐へて地く投はけり  
たは月鼻のく血とをくく昂死  
武田家の大將大晴……  
~~~~~威稱りり北我家書

一天文十八年四月景虎信州表

夏向わし軍機評定一決……  
一日廿二日小諸軍総長と出馬……  
羽田と海北平と着陣……  
今去年の……武田晴信……  
小諸宿と少……小室へ押……  
平……出……五月朔日……  
對陣……翌六日景虎使者と武田  
晴信の方……遣……我村

上義清のたまふは信州へ出陣して  
て志らく義陣とて之をもよひて一戦  
の後負と決せらるすゆいも預くは  
化國の諸將より白く武威を振つと  
いふも吾も亦も亦も亦も亦も  
とて一々武勇より化國の諸將より  
異ならんや明日は是れ一戦の勝負  
を期しうらに常とやうとするべき

とあり又一説小我等信州へ出陣す  
事い自身の欲とつて出陣すは村と  
義清と本陣と返りてなりとの義と  
小笠原同公なくゆり我等も有るの一  
戦をうらり勝利は互の手物清と  
うら晴信返事ふ回くも方村と義清  
よだのうらむと村とは自分らと  
この信州へ出陣は入公もやと

一々晴信も存念小我も人し敵味方  
分り勝負終りく返さずすし昔し  
今もあつた入し景虎の志は是を  
小也くも枝上存念のいし晴信在世  
の心なるまじくなく有るの合  
戦とあり事しともむし晴信の  
村よと本心く返さぬと我等のたき  
と仕はさあつ合戦しむしはさ方

より一戦と始りらるし  
誰くもしあき我等の本心甲州の内  
手と入らるし晴信  
かつた合戦の合戦はかりし  
返事し六月廿七ヨ八日景虎  
八千の軍勢とす一戦とす  
る敵艦と見ると又十日の相使者とす  
兎角此一戦なるし

小の冨集ハ戦中ハ能生國ニ公クナク  
ゆハハハハハ兵日の午刻ニ陣ト拂ハ  
六七月の間に戦中境ヲたむルハ少ク  
弱事ト由リ倂リハ近敵ヲ驕ラ  
もろくハ早ク帰朝ナリ

春日山日記  
戦後軍記

一 天文十八年五月ハ長尾定實ハ下都  
の軍兵ヲ命ジテ景虎並ハ下庄源次  
而盤長中作次勝所ハ定實等ト許

定一 五月七日ハ菅名女田支隊ト  
攻取リ同日ハ村松の要害ト攻落  
シ初メハ各向ラシ諸將皆若武者  
を以テハハハハ新奈田尾張ハ長敷を  
大石トシハ菅名村松女田の要害ト攻  
テ下都の通路自由トシテハハハハ村松ハ  
ハ小旗平九郎ハ尉軍忠ありハハハハ定實



より感状と給ふ逆臣黒田金津、  
武蔵日と進みおとろへぬ〜  
出〜し叶ひし唯殘黨と集の新山軍  
隊の二城に揃籠るを秋足矣い進江  
入道兩播只見次席左馬大熊徳守  
庄新左馬と使し〜枋尾〜き〜  
景虎と百〜長尾の家智〜主人事  
と作生ハ〜諸長輩〜然ふ亦〜

佛神三宝のか護長尾再興のめ  
到〜ぬ〜是と悦ハ一月と起る〜  
と後一決〜時日と福〜枋尾〜  
景虎〜後〜りたに景虎中〜許容る  
〜〜若輩〜〜國家の器〜  
せし中〜の清〜及〜旨迄言あ〜け  
る〜また矣〜再三の清行あ〜  
も頻〜誅め〜色り〜景虎も辭〜

るふあくさうして旗と領り國中の  
逆位と退治し一家の改替よさう  
ハ巨細よさうす産取のつと念とつけ  
是と勤しき多領者ハ八月府内よ  
来着し是等の前より景虎長尾の  
家督よさう終ハ是より諸士を  
景虎に随順す 松蔭夜話

一天文十九年二月朔日國中の諸士

兼首の賀儀と景虎ハ礼ハ諸士  
礼法公嚴かり是ハ長尾の家督と  
相續ありしにうきハ始ハの元日の  
春ハいふまじハ國中群衆ハハ祥湯  
し年取の礼儀事畢ハ修寒残雪  
も少し長閑なりハハ三月朔日  
景虎ハ府内を以出立古志郡ハ  
出馬ししことハ二條城を攻めし時

よき長尾平六郎俊景、一族并々其  
田和泉の秀志、親族より精を立  
千餘捕籠り、要害よく堅固に籠り  
り。里田和泉の秀忠、佐治の軍に  
三千しりたり。新谷田尾張の長敷本  
店、深次郎繁長、比呂娘、其色を  
依屋、長尾竹俣古馬、討春朝二の  
手、以後下世の朝信、中経、越守、夜

資、黒川備守、為憲より搦手、一古  
志、誰何の秀景、新井、彦次郎、正世  
平賀、久之郎、頼経、松井、清七郎、近藤  
高梨、保三郎、貞頼、三の手、本庄、英化  
り、慶秀、高松、川根、唐崎、孫次郎、大寺  
龍舟、石向、小川、久野、行と、足利、三千  
も、新山、味と、屋、内、大、搦手  
八千、徳、一、條、味と、攻、圍、む、に、致

中ウ浹袍も之と有違し防く  
之も昇手極難多き事もせし  
手負死入と集戦攻上りし  
もの城云々し終に攻能く  
号手より火箭と射入燒えし  
長尾平六一類黒田門棄二千餘皆  
一撃に滅亡也 北越軍元

一天文十九年景虎例年のごとく

信州表へ進軍し移し戦兵七千餘  
兵にまじり五月朔日前備出陣  
一日景虎出馬なり次は駒馬難云  
要是しし同日佐久郡に陣を  
とりし晴信は同日三月十日午の刻  
小甲府を抄之上野松井田城へ陣  
敷せししし而も小笠原長時未嘗  
組合と下道落しし折し出軍を放火

月六日小室宗久と後貞と決り人しせり  
多しと云ふに月日の者地来たり  
告て日越村の景虎有月朔里に出馬  
し今なる地藏峠を越し佐久郡  
まてし龍谷へ入つていりしとて未嘗  
松本の支款とあり信佐久郡へ軍  
と移し景虎と向ふまに、斯く云

月十日申の刻より景虎使者とてつづ  
十一日一戦あり及いしなりし晴信最も公  
将りしとて、返答ありしとて之十一  
日卯の刻よりありおる右に飯富左兵衛  
田舎八次を厚給し与へたりし  
て景虎二万の人数と一手の如くに  
相合せ一の先の二の手よりは旗本とて  
しとて既し合戦始りしとてありし

多々黒雲晴信の旗本のよ／＼覆ひ  
つて我も景虎の徳人數のよ／＼  
彼雲吹らうたり景虎をよ／＼見て采  
幣と取く早／＼誓と川揚け旗本の  
伎と一番入り入浴り／＼ 同と

一 天文十九年七月我中國より洲士  
帰り来り言と／＼いしく彼國の  
風聞とあ／＼いしく神保雅名と始

／＼／＼其おの諸お／＼あ／＼／＼景虎公  
の甜と食／＼小利と取る／＼いしく身とあ／＼  
／＼／＼智謀畧とあ／＼いしく／＼をり  
自己／＼／＼誇り驕慢の公とあ／＼  
／＼／＼／＼いしく景虎々重祿／＼白ふ  
／＼出張あ／＼い／＼何きし牒／＼合とあ／＼あ  
／＼／＼／＼／＼／＼兵とあ／＼い／＼と  
／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

あつて昔も握るやうに曾て愈るよ  
一たう又土肥土屋遊佐の輩とあつ  
一眉と嘖くいとく景虎の智略謀  
策未世も振出たう名將かそく  
當代も肩と並ぶつうらなを  
子細い進軍信州へ出張して五日  
晴信とら矢と接くりう擡指と具子  
信丹へ住進来たうて往きと知る

晴信も景虎と剛敵と思ふよ  
思く云と乍し解と云へし  
十と不敗の佐と云く我後響の間際  
と向ふ龍虎二つの銭しつに付た  
し、毎冬景虎向ふへ出陣の形勢と  
観望しつに極子弱きと似つ弱  
あつて強つてつう強つてつう強  
柔剛強弱と柔徳つたう大将なり

其年十一月二十一日甲辰日の東嶺より  
少くも異ありし輔翼の老臣に、作次海  
にりては、南代不雙の良長を、景虎  
の軍一呼として、矢の指揮をとり  
信胤も、これに彼を、行を、成、内、大、長、の  
遠、苗、を、り、ち、長、候、を、り、と、り、の、英、武  
雄、畧、の、一、卷、を、代、り、由、信、一、く、是、行、に  
至、り、是、行、信、に、軍、旅、の、法、を、精、一、成

陽、に、伊、予、あり、周、成、太、く、望、あり、と、こ、と  
一、に、亦、長、尾、善、代、の、老、臣、に、甘、糟、近  
は、り、由、に、山、崎、に、加、治、遠、に、り、を、り、と、り、革  
常、智、仁、信、忠、の、五、村、兼、俊、の、士、を、り、を、り  
長、尾、誠、前、に、政、景、折、清、和、泉、を、其、性、甘  
糟、に、は、如、信、子、及、は、り、と、り、元、来、血、氣、の、常  
者、を、り、と、り、と、り、白、く、と、り、と、り、か、ぬ、り、以  
碎、く、楚、王、の、山、と、は、り、人、を、り、と、り、樊、塘、韓、信



の言も亦くうもいふたし景  
虎眼カを以て小身より百之ら何  
豊年より少者も音慮ありて年古  
あきらむる其大志倫より曾し量  
之よりいふよりそり書時感都之の  
善惡を考ふ其主の可なり臣下の  
邪正も知る事一志も景虎のら矣君  
臣合御しておしめく南せし角と

並よていふをいへくも向くもら矣と  
わらふん有りていふに潤み入り  
も自滅を招く異を以て可程降参  
し景虎の軍一門は馬と繫み去く一  
家と保はんも去りし許辰一同も  
怪し告ふも者ありし一國古振の  
事ありと言ふし景虎を此るも其後  
了後遺何るも是れ是夜良久し他

臣其故と云ふは解しし事也  
命りてきていりて汝等と執中少子等  
我志と通する者を得るも懇懇と  
招き置く其盟為と信じて来たは  
し件との密旨と作合の務不豊  
る後存と承りし事不し我中  
奔出と云ふ事 春日山日記

一 天文十九年一武田大信長是時信信信州

信福と云ふ事 小室家 長時と合戦  
小室家 家重威に云ふ事 既平州  
二 三所 崩れ引退す 総崩れと見え  
し事 長時に付利左衛門 附崎台十七  
と 味方と云ふ事 小室家 御故  
と 景虎云 九月十日 府城と云  
海井と云 香津と云 特信 小室家  
と 云 信福と云 川井 海井と

少ニ一上田と通て荒瀬川一のはる荒  
瀬一在津一鐵後部一押へ引る同  
其八日十月二日一五津ありて  
約三時合め一敵一陸軍場の手と  
ちり味子一奇中止の位と無一  
其のほろいなるり心も飯高  
部が浦小山田傷中る隊光も軽  
とど一魁首長尾政景のふと日

弓鉄砲のせり合わりらした十月二日  
未の刻一敵方のあ見武者二十四騎  
乗連一池田良久一見分と子  
中作兵足引觀を一徳守の格  
其一中物見の規程一りて  
先隊下糸と加らる鉄砲と放ら  
る一以覺ありて一や一  
ハ公を一同も一を名と政景

命一様小泉位の被官集りて輕  
辛四五十人をも川に引き出さつて  
うゝしと業めこゝの件の軍監列  
と礼しと崩き乞ふ部々同日  
の卯の刻景虎を一戦と懸たふ  
魚しと乞切の面と陣次し  
旗と止しえらりしとゆふ氏田家  
我々のらりしとを同じ一の乞し

うゝと百騎内弁と支記しと老乞と  
もと誼し持しと三隊とを若干  
の武者二十騎四十騎と組合し  
是と巻しと戦と結りんとす  
よしと今日の軍味方の孫利全  
うゝしととんこも老川入るんし  
宣しと忽ち乞と收りしと本國へ  
現しと終ふ我しと為給の老達し

切亦わるとる筈ありて村上義清甘  
糟込に四隊と八隊よりくく跡  
残るも半時しう先達より川拂  
い後よりしきい甲州勢くい当んと  
きそいゆふ村上をくくはし  
すまを作らんとしに對し甲州  
しころを味方とすにきく  
捲たつる甲州二のの陣へ入り

苦戦しりて我軍甘糟込河原と  
撃つと押さふお時信物と武  
とくもそし先隊と割し軍とく  
方も備とて後日淡路の武畧  
川拂へて城をく凱  
陣も後越甲の武者ありて飛  
虎のこくく衆く感  
あへし 北城家書

[Faint, illegible text on the left page]

[Faint, illegible text on the right page]

